

学の学長であって Liard の推せんによりデュルケームは大学で教鞭をとったのであるが彼がボルドー大学に赴任した時、文部省はデュルケームに教育学を正式の講座とし、社会学はその余技として社会学の講義を行うことが許されたのである。それ故デュルケームが担当した講義のためデュルケームは非常に多くの時間を割愛しなければならなかった。しかしデュルケームが教育学の講義のため授業は多くの教育社会学上の業績を生むことになった³¹⁾。しかし教育学は社会学年報においてはその位置を見出すことはできなかった。社会学年報の文献分析の大きい区分けの標題にも教育という項目はでてこない。たとえば年報の第一輯の刊行途中で補われた集合表象という語は第六巻からはじめて用いられた。しかしそれよりずっと前から学科として成立していた教育または教育学は年報では問題にされなかった。この理由について何らかの説明が行われてきた形跡も全く存在しないのである。ボルドーからパリへ移ったデュルケームがパリ大学で空いた席はビュイツソン教授のものであった。だからデュルケームは Buisson の教育学の講座を補充するためにパリに移っている。従って大学から教育学が消失したためなのではない。筆者が不審に思い疑問に思うのはこの点である。デュルケーム学派ないしはフランス社会学派は教育学をどこに譲渡したのかあるいは他の機関に委任したのか、明らかではないし、協力者ことにデュルケームよりも早く正式の社会学講座の主任となった Halbwachs はデュルケームのフランス教育思想史の第一次大戦後の出版にあたり、その序文を書いているが、またその序文でデュルケームの教育に関する業績について言及しているにもかかわらず、教育学の行方については一切沈黙を守っているにすぎないのである。年報で扱われている文献分析の部門の項目はたとえば、美学、言語学、技術などとふえ戦後では労働なども大きく増えている。にもかかわらず、教育は一体どのようになったのか、教育は学

問的分析の対象ではなくなったのか、教育は学問とは全く別の技法の問題となったのか、筆者はそれを知りたいのであるが、それに対する手がかりをつかめずにいる。とにかく教育の行方が明白にならないことが年報の充実・拡大の時代における最大の不審点である。教育は社会学の発展に関係はなくなったとでもいうべきなのであろうか。

またアメリカ、イギリスなどデュルケームのおよびデュルケーム派の業績に対して非常に注目してきたの学界でもこのことに対しては大きな関心をもたずにいるようである。欧米諸国またはその主要国では教育は社会科学と全く絶縁してしまっているのが常識だとでもいうべきなのであろうか。

なおこれと関連して残念なことはデュルケームとウェーバのドイツとフランスの社会学の両首脳が両国の社会学界の活動が活動領域を拡大しつつあり、すでに上述したようにジンメルやラッセルやさらにはスタインメッツの論文が社会学報に掲載されていたのに、古典社会学の両国の代表的学者と見られた二人が全く相互の存在さえ気づかずに、その間に何の交渉もなく終ってしまったという問題である。たしかに関連諸科学の文献の批判、紹介にもジンメルは別にして全くウェーバーに対する言及はなくこの問題はアメリカの社会学者 Tiryakian 教授によって1966年³²⁾はじめてとりあげられたものであるが、この点を社会学界における不運なめぐり合わせとして想起されるため、ここにきき加えておきたい。これについて最近の A. E. S.³³⁾ (1992年 n°2) に Steiner によって詳細されているが、ここではそれに依拠して説明しておきたい。1966年の A. E. S. の n°2 においてティリヤキアンの問題提起はデュルケームとウェーバーの二人はともに近代社会の建設に大きな役割を果たした巨人であり、しかも両者の生存期間も(知的活動期間も)ほとんど同時期である。にも拘わらず、このように両者間に相互に相手の存在について何程か知っていていいはずなのに今日

31) われわれはそうしたものとして「道徳教育論」「フランス教育思想史」などである。前者は1925年、後者は1938年デュルケームの弟子たちの手によって刊行された。

32) E. Tiryakian, 'A problem for the sociology of knowledge: the mutual unawareness of Durkheim and Weber' A. R. S. 1966, n°2 p. 330-336

33) A. E. S. は *Archives européennes de sociologie* の略であるが、この定期刊行物は1960年 R. Aron などヨーロッパ社会学者の編集で刊行されたものである。